
怖い占い、その後に

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怖い占い、その後に

【著者名】

Z8988A

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

特別編単行本23巻『的中占い師の謎』のその後のお話。哀は占い師に言われた事を気にしてしまう。

どうして？

なぜなの？

不安がなくならない。

私、灰原哀は、あの時占い師に言われた『やがて海の向こうから災いがやって来る。氣をつけなさい』の言葉が妙に頭に引っかかっていた。

どうしてこんな事気にしてるの？

あの占い師はインチキだつてわかつたじやない。

それに、その後占い師殺人事件の犯人に襲われたけど、工藤君が助けてくれたし、『オマエは死なせない』って言つてくれたじやない。

・
なのに、どうして不安がなくならないの・・・？

コナン「まだあの占い師の言つた事気にしてんのか、灰原？」

哀「そ、それは・・・」

コナン「心配するなつて、ヤバくなつたらオレが守つてやつからよ。」

哀「ありがと・・・」

そう、彼のこの言葉が、私にとっては大いに救いの言葉となつている。

工藤君はまさに、か弱いお姫様を守ってくれるやさしいナイト。

今日ぐらいあなたに甘えても、バチは当たらないよね？

哀「ねえ、工藤君。」

コナン「なんだ？」

哀「夕食の買い物につき合つてくれない？」

コナン「ああ、いいよ。」

哀「ありがと。」

コナン「じゃ、行くか。」

そう言つと、工藤君は私の手をキュッと握つた。

哀
ト
／
／
／
／
／
／
／
あ
・
・
・
・
／
／
／
／
／
／
／
ト

コナン「灰原、行くぞ。」

私は彼に引っ張られるまま、デパートに走つていった。
その時、私達の事を監視する怪しい人影がいた事に、私は気がついていなかつた。

米花デパート

米花デパートの食品売場で、工藤君は手際よく商品をショッピングカートに放り込んでいた。

私は下を向いたまま、ショッピングカートを押している。

「ナン、どうしたんだよ、灰原？」

「ナン、そ、園子姉ちやん……」

園子が「イイイガリ」フレント連れて夕食の買い出したなんて

「かんぢがいがいの姉ちゃん一回遊びに来ただよ！」

工藤君は必死に弁明している。

また元ゴーデダ。

園子「隠さなくていいって！歩美ちゃん達が、2人はラブラブだつ

私も工藤君も、もうすでに顔が真っ赤っかだ。

園子「じゃあね！コナン君、哀ちゃん！」

そう言つと、園子はタタタと走つていつた。

コナン「たく、園子のヤツは・・・」

哀「うん・・・恥ずかしかつたけど、なんだかうれしいわ・・・」

コナン「え？」

哀「私と工藤君を、恋人同士に見てくれる人がいたなんてね・・・」

コナン「灰原・・・」

哀「工藤君・・・今日の夜ね、博士学会で遅いの・・・1人じゃ不安だから、泊まつてつてくれない？」

コナン「ああ、いいけど・・・」

哀「やつたあ！」

工藤君は、私が普段みんなに見せない笑顔をしたので、とまどつて いる。

だつて、うれしいんだもん。

工藤君が泊まつていつてくれる事が・・・
でも、どうして不安なのだろう？

そう私は思つていた。

私と工藤君は買い物を終え、帰路についた。
帰り道、また後ろに誰かの視線を感じた。

阿笠邸

私と工藤君は阿笠邸に着き、中に入った。

工藤君は、彼の家から持つて来た推理小説をリビングのソファーで 読んでいる。

彼が読んでいるのは、私もたまに読ませてもらつている、アガサ・クリスティの『そして誰もいなくなつた』だ。

とてもハラハラする展開で、私は楽しませてもらつている。

私は、彼の推理オタクぶりに影響されている事に気づいて、クスッと笑つた。

哀「工藤君、そこで待つて。今から晩ごはん作るから。」

私はキッチンに入り、晩ごはんの準備を始める。

今日のメニューは、カレーライスだ。

私は材料をまな板に置き、包丁を出した。

まずはタマネギから切り始める。

ザクッ。

包丁をタマネギに入れた。

哀「染みる・・・」

私はタマネギの汁が目に染みて、涙が出た。

私はタマネギの汁に翻弄されながらも、タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、お肉、なんとかすべての材料を切り終えた。

鍋に材料を放り込んで、それからカレーのルーを入れてかき混ぜる。フタを閉め、カレーができるまでの中、私はタマゴサラダを作る。

30分後、カレーが完成した。

哀「工藤君、ごはんできたわよ。」

コナン「あ、ああ。」

工藤君はそう言つと、本をソファーに置き、一息ちりて来ると、料理を並べるのを手伝つてくれた。

それから、2人で同時に席に着く。

私と工藤君は、晩ごはんを食べ始めた。

コナン「おいしいなあ、灰原の料理は。」

哀「／＼／＼あ、ありがと・・・／＼／＼」

コナン「博士とは大ちがいだぜ。」

工藤君の言葉に、私は前にキャンプした時の事を思い出した。

博士が切つた野菜は、全部つながつちゃつてたつけ・・・

確かにあのあたりまでは、工藤君が文句を言うのもしかたがない。

だからこそ、私が博士に料理を教えているのだけど・・・
いつこりに上達しないのよね・・・

コナン「あれじや、これから先どうやつて食べてくんだよ・・・」

哀「ア、アハハ・・・」

私は、苦笑いを浮かべていた。

食事も終わり、私と工藤君は交代でおフロに入つた。

哀「フウ・・・スッキリした・・・」

私がパジャマを来て上がつてくると、工藤君はもう2階に上がつて
いた。

私も、2階に上がつていく。

私は、工藤君とは別の部屋に入つた。

私はベッドに潜り込む。

哀「ふああ・・・眠いわ・・・」

私は布団をかぶり、眠りについた。

それからしばらくして、裏口のドアがガチャガチャと音をたて、ド
アが開いた。

開いたドアから、覆面をかぶつた30代ぐらいの男が入つて來た。

この男が強盗なのかは、まだわからない。

男は辺りを見回し、螺旋階段の所へ來た。

上から、哀の眠り声が聞こえてくる。

男は、ニヤリと笑みを浮かべると、2階に上がつていった。

男は2階に着くと、『灰原哀』のネームプレートがかかつている部屋のドアを静かに開けた。

ギイ・・・

男が部屋に入り込むと、哀はスヤスヤと寝ていた。

哀「スースー・・・・」

男はニヤリとすると、ベッドに近づいていく。

ガバッ！

哀「うつ！？」

哀が気づいた時には、もつ男に口を手で塞がれていた。

哀「うつ、うつ！！」

哀はジタバタともがいた。

「黙リナ。」

男はそう言つと、ナイフを哀に突きつけた。

哀「うう・・・・」

哀は黙つてしまつた。

男は哀を持ち上げ、その腕に抱えた。

ガバッ！

哀「キヤーッ！？」

コナン「！！」

哀の叫び声に、コナンはすぐに反応した。

コナン「灰原！！！」

コナンが部屋を飛び出した時には、もつ哀は男に抱えられ、下に連れ去られていた。

哀「工藤君助けて～～～！」

コナン「灰原～～～！」

コナンの必死の追跡もむなしく、哀は男に裏口から連れ出されてしまつた。

「ナン「灰原ーっ！」

コナンは大声を上げたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

なぜなら、哀の服にはすべて、ボタン型発信機がついているからだ。哀が遅くなる事がよくあるので、阿笠が哀に内緒で彼女の服につけていたのだ。

もちろん、洗う時にははがして、洗い終わつた後につけるし、服と同じ色だからバレるワケがない。

もつとも、これを依頼したのはコナンだ。

哀を愛するがゆえに。

しかし、哀はこの事にまったく気づいていなかつた。

それが幸い？

一方、連れ去られた哀は、車に押し込められ、ジタバタともがいていた。

哀「放して、放してつてばー！」

男は無言のままハンカチをポケットから取り出すと、ハンカチにクロロホルムを染み込ませた。

哀「あ・・・うつーーー！」

哀が次に叫び声を上げようとした時には、もう哀の口はハンカチで塞がれていた。

哀「むぐぐーーー！」

哀はジタバタともがいたが、シートベルトのせいで身動きがとれない。

ほどなく、哀の目はトロンとなつてしまつた。

哀「うう・・・（工藤君・・・助けて・・・ーーー）」

哀は氣絶し、グツタリとなつてしまつた。

哀「うう～ん・・・」

意識が朦朧とする中、哀は目を覚ました。

まだ頭がクラクラする。

あの時、クロロホルムをかかされたからだろ？

立ち上がるとした哀は、自分の状態に気がついた。

哀「（手足が動かない・・・！）」

そう・・・哀の手足は、身動きできないように繩でグルグル巻きに縛られ、ベッドにくくりつけられていたのだ。

哀「んんっ！～んむう！～」

さらに口には布がガツチリと巻かれ、猿轡さるくつわをされている。

哀「んむう！～んむう！～」

哀はジタバタともがいたが、まったく身動きがとれなかつた。

哀「うう・・・」

哀がうつむいていると、哀を誘拐した男が部屋の中に入つて來た。

「氣ガツイタカイ、オ嬢チャン。」

哀「！～（が、外国人・・・！）」

さらわれた時は覆面をかぶつていたから気がつかなかつたが、覆面がない今はよくわかる。この男は、片言の日本語を話す外国人だつたのだ。

「オ嬢チャン、カワイイネ。私ハコノ1週間、ズット君ヲ見テイヤンダヨ。」

哀は、男の言葉を聞いて、やつとわかつた。

ここ1週間哀が感じていた視線は、この外国人のものだつたのだ。
「私ハ君ヲズット見テイヤ。君ハカワイクテショウガナイ。私ハ君ガ欲シインダ。」

哀は、ビクツとなつた。

哀「（そ、それ、どういう事・・・？まさか、この人、ロリコンなの！？）」

ロリコンとは、ロリータ・コンプレックス。

おもに大人が、幼女を性愛の対象にする事や、その行為をする人の事を指す言葉だ。

さらにこの男は、外国人・・・
あの占い師が言つた『やがて海の向こうから災いがやって来る』とは、この人の事だったのだ。

しかも、ロリコンの氣がある外国人・・・

哀は、体がふるえる。

自分がこの男にさらわれてから、けつこう時間がたつてているのに、この男は身代金を要求する電話をかけてはいない。

身代金目的ではないのなら、残る可能性は2つしかない。

最初から哀を殺す氣が、哀を襲う目的で誘拐したかのどちらかだ。

哀「んっ・・・んん・・・・」

「才媛チャン、ヤツパリカワイイネ。私ハ君ガ欲シイ。モウ君ハ、私ノ物ダ・・・」

男は、ジリジリと哀に近づいてくる。

哀「（イヤ・・・イヤア・・・・）」

「ソシナニ怖ガラナクテモイインダヨ。イウ事ヲ聞イテクレレバ、チャント帰シテアゲルカラネ・・・」

男は、今まさに哀が縛られているベッドに上がるうとしている。
哀は、泣きそうになつた。

哀「（工藤君・・・助けてえ！・・・）」

男が哀に襲いかかろうとしたまさにその時、部屋のドアが吹っ飛んだ。

「ガツ・・・！」

男はあっけなく吹っ飛ばされる。

コナン「灰原！・！」

コナンが中に入ってきた。

哀「（工藤君・・・！・！）」

コナンは哀に駆け寄ると、哀を縛っていた縄を解いた。

コナン「灰原、大丈夫か？」

哀は涙が出てきた。

哀「工藤君～っ！！」

哀はコナンに抱きつき、泣き出した。

哀「え～ん、え～ん・・・工藤君・・・怖かったよお・・・」

コナン「もう大丈夫だからね、灰原・・・」

その後、コナンの通報により、男は未成年者誘拐罪で警察に逮捕された。

男の動機は、ここ一週間ほど哀を監視していて、哀を自分の物にしたかったからだといつ。

その夜、阿笠邸

哀はコナンと一緒にベッドで寝ていた。
コナン「どうしたんだよ、灰原？ オレのベッドに潜り込んできて・・・」

哀「だつて・・・」

コナン「安心しろ、もうオマエを怖い目にはあわせないから・・・」
コナンがそう言って哀の方を向くと、哀はスヤスヤと寝ていた。
コナン「たく、さつさと寝やがって・・・」

コナンが寝返りを打つと、哀は笑った。

哀「（これからも私を守ってね・・・王子様・・・）」

(後書き)

このお話は、名探偵コナン特別編23巻の『的中占い師の謎』の後
日談のお話です。

先に特別編を読むと、もっと楽しめるかと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8988a/>

怖い占い、その後に

2010年10月9日07時45分発行